

氏名	魯 怡瑩 (ロ イエイ)
学位の種類	修士 (生活科学)
学位記番号	生修第 241 号
学位授与年月日	令和 4 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規準第 15 条第 1 項
学位論文題目	論文題目 少子高齢化社会における高齢者の住環境の改善に関する研究 —副題— 日本名古屋市と中国上海市を対象として—
審査委員	主査 村上 心 副査 滝本 成人 副査 川野 紀江

## 論文内容の要旨

### 第 I 章 研究の概要と構成

本研究は、世界でも類を見ない速度で超高齢社会が進行した日本名古屋市と、同様の状態を迎えようとしている中国上海市を対象として、高齢者及び高齢者を含む家族の住環境と居場所／サードプレイスに関する国際比較調査を行い、高齢者の生活実態と支援制度及び文化的背景の整理、居場所／サードプレイスの把握とその「幸せ感」への寄与を住環境の改善という視点で明らかにすることを目的としている。

本論文は、5つの章から構成される。第 I 章では、研究の背景、目的、構成、及び方法と位置づけを述べている。第 II 章では、日本名古屋市と中国上海市を対象として、高齢者への支援制度に関して整理している。第 III 章では、高齢者及び高齢者を含む家族の住環境に関するアンケート調査を基に、高齢者の生活実態と支援制度及び文化的背景を整理／比較している。更に、第 IV 章では、アンケート調査を基に、居場所(サードプレイス)の把握とその「幸せ感」への寄与度を分析している。これらの成果を、第 V 章で総括し、日本と中国の高齢者の住環境と「幸せ感」及び住環境を向上させる為の課題と方向性を論じている。

### 第 II 章 高齢者への支援制度

第 II 章の目的は、日中両国の高齢者向けの支援を法的制度と生活面での支援に分けて比較を行うことである。結果、日中両国は高齢化の違いによって、高齢者の養老施設や制度面の整備にも大きな問題を抱えていることが明らかになった。全体的に見ると、中国は国家としての人口が多いが、一人っ子政策の実施と一人当たりの寿命の増加に伴い、少子高齢化が急速に進行した。中国の高齢化は国家のマクロ政策の影響を受けていると

言える。日本も人口が 1 億人を超える国であるが、未婚率の増加や晩婚化により、出生率が低下している。一方で、高齢者に対するの高度な社会保障制度により、平均寿命が長くなっている。これが日本の少子高齢社会をもたらした原因である。また、高齢者福祉制度の違い、年金保障制度の違いなども住環境の違いをもたらしている。

その他、中国は福祉関連施設建設に対する整備意欲が不足しており、高齢者向けの保障制度の戦略計画が十分ではない。日本と比較し、様々な客観的要因が影響し、中国の高齢者福祉事業の発展は進まず、現在においても高齢者福祉事業の発展は不完全な段階といえる。

### 第 III 章 高齢者の交流と将来への不安

第 III 章の目的は、日常の活動と交流相手、将来への不安に着目して、コミュニティの形態、個人、社会の繋がり、サードプレイスに関する世代ごとの違いを明らかにすることである。調査方法は、名古屋市港区、千種区、西区、中区、緑区と上海市浦東新区を対象としたアンケート調査である。名古屋市においては、投函・郵送回収方式とし、配布数 10,910 世帯、回収数 1,152 世帯(回収率 10.6%)であった。上海市においては、web 方式とし、回答は 1,725 件であった。調査は 2021 年 1 月から 10 月に実施した。

結果、日本では「友人」に次いで「家族」が交流相手となるが、中国では「家族」との交流は低く、高齢者と子や孫との関係が親密でないことが明らかになった。将来への不安については、日本が年代による差異が少ないのに対し、中国では 40-64 歳において、高齢者より「親・子ども」「健康」への不安が強かった。これは中国の高齢者が、

将来、子や孫の世話をすることを義務的に感じ、懸念を抱いていることに起因するといえる。

交流相手との交流頻度の関係から多変量解析により類型化を行なったところ、「家族」と「毎日交流ある」グループは、日中いずれも含まれていた。一方、交流頻度が「月に数回」のグループは日本では見られるが、中国ではわずかであった。つまり、毎日顔を合わせる、子や孫の世話は日中いずれも行われているが、月に数回の余暇としての「家族」との交流は中国では少ないことが明らかになった。

#### 第IV章 高齢者の居場所

第IV章の目的は、高齢者にとって適切な居場所のあり方を明らかにすることである。3章と同様のアンケート調査に加え、中国においては望まれる居場所の住環境について追加のアンケート調査を行なった。

結果、日本は「飲食店」を居場所と感じ、「他者と会うため」に居場所を訪れていたのに対し、中国では居場所が限定されず、高齢期は「健康のため」その他年代においては「リラックス」「ストレス発散」が目的となっていた。

また、生活の自立度と居場所とを感じる場所の関係から多変量解析により類型化を行なった。生活のサポートが必要と感じる人は「福祉施設」を居場所と感じ、中国の高齢者に多くみられた。日本では自立度の高い高齢者が飲食を伴うスペースを居場所と感じていたことが明らかになった。

一方、居場所の住環境については、中国において「家族と一緒にいる場」は居場所として快適と感じる要因にはならず、空気や水の清浄度、緑化、治安を重視していることが明らかになった。

#### 第V章 研究の総括

本研究では、日中の高齢者の住環境に関して国際比較調査を行った。日中両国は、共に、深刻な高齢化社会に直面しており、高齢者の介護に対する社会的な支えに迫られ、「高齢者の多様なニーズにかなった住居やサービスを選択できるようにするとともに、高齢者が、若年層、子育て世帯等を含む多世代により形成される地域コミュニティとの繋がりをもって生活できる住環境を形成する」ことが求められていることがわかった。

第I章では研究の背景と目的、研究の構成を述べた。高齢者の抱える問題には、高齢者が身体

機能の低下に課題を抱えていることが判明した。

日常生活面においては、歳を取るにつれて、体力や気力の低下など、毎日の簡単な家事でも難しいと感じる高齢者が多く、一人で生活するのが困難であることなどの問題点が判明した。

第II章では、法制度と生活支援の日中比較を行なった。日本は介護保険制度を基盤として、高齢者の介護や生活支援を行うサービスが充実していた。介護保険は給付型制度であるため、サービスや施設建設を民間が担う動きがより、活発になった。中国では高齢者福祉事業が十分に進んでおらず、需要があるにもかかわらず、高齢者施設の建設意欲が不足していることが明らかになった。

第III章では、高齢者の交流と将来の不安についての日中比較を行なった。日中の相違点は「家族」に起因するものであった。日本の高齢者は「家族」つまり、子や孫と適度な距離感をもって、交流していた。対して中国では「家族」との交流は少ないが、交流をもつ人の中には、毎日、子や孫の世話を行っていることが明らかになった。それは将来の不安が「親・子ども」に関する不安となって、現れていた。

第IV章では、高齢者が快適と感じる居場所は日中で異なることが明らかになった。日本では「他者との交流」を重視しているのに対し、中国では「リラックス」「健康増進」の場が居場所と捉えられていた。特に「家族と一緒にいる場」は居場所として重視されず、子や孫の世話を毎日行う実態とは異なり、個人で過ごす場所が望まれていることを明らかにした。

日本の高齢者に望まれる居場所とは、人との交流の有無に起因するが、これは他者と交流を持たない人にとっては、高齢になった時、居場所を持ちづらくなることを示唆している。コミュニティ形成を支援するシステムや場の構築が必要であろう。加えて、人との交流に捉われず、個で過ごす場所を居場所と捉える中国にも学ぶところがあるといえる。

一方、中国の高齢者が望む居場所とは、第一に清潔で安全である住環境であった。まずはそれらの整備を行う必要がある。加えて、子や孫の世話を忙殺され、老後が楽しめないと感じる不安や、家族に介護の負担がかかる懸念を払拭させる、育児や介護の社会化に向けたシステムの構築および、個人で楽しめる居場所の創出が必要である。